

比島の混戦 陸に上がった海軍

愛知県 水谷 義 一

大正十三（一九二四）年三月四日、名古屋市東区黒門町でクリーニングを家業とする家に生まれ、家はその後に移転、同区豊前町で同業を継続しておりました。高等小学校卒業後、筒井青年学校本科四年卒業。

その後、国民徴用令により、愛知航空に組立・板金工として勤務していました。しかし、戦局も段々と進展し、直接我々の耳に入ってきた来ないで、緒戦の戦勝、戦勝という空気とは違った緊迫感を何となく心に感じるようになって来ていました。

その頃になると、同年輩の学友や愛知航空に勤務している仲間の中にも、陸海軍に志願する人達も多くなり、私もそのような気配の中で、海軍に志願しなければと、心が動かされておりました。それは、私が愛知航空という航空機関係の会社で、第一線で戦う航空機

と直接関係していたからで、これも自然に環境が止むに止まれず海軍志願へ踏み切らせたのでしょう。「皆に遅れてはならぬ」という気持ちも高まるのが、国民として青少年として当然のことでもありました。

昭和十八（一九四三）年八月十日、海軍を志願し、広島の大竹海兵団に入団し、水兵科第十三分隊の第十教班に配属されました。分隊長は新基四郎特務大尉殿、分隊長は田林茂特務兵曹、そして広実班長ということです。海軍の分隊長は、陸軍では中隊長に当たる方です。

私の携帯履歴は終戦まで預けてありましたが、爆撃でなくなっていました。大竹教育付砲術学校出身班長は、「至誠・温厚・鉄石の意志・強靱なる体力、帝国海軍は下士官でもっている。そのために精神緊張棒でもっている」と言われていました。

特目、特に砲術は直屬上官のみ考課を持っている。海軍は、陸戦・砲術・基本教育に敵しかったです。砲と銃とをやり、陸戦もやりました。また「女性には

気をつけろ」と、罰則は厳しかったのです。

昭和十八年十一月十五日、海兵団を卒業し、三重航空隊（三重県一志郡香良州町にあり）飛行第十三期予備学生の二分隊付となり、私は少年兵でしたので当番のような勤務をしていました。

昭和十九年二月、横須賀海軍航空学校第十六期普通科応術練習生となり、五月五日卒業。海上救護と航海術、結索、消火器取扱、ワイヤーロープが切れた時につなぐ、消火作業、鎖を切って継ぐなど……。艦内補強、ロープを叩く丸太棒を扱う。鳶職のような服装で情報をさぐり、忍者のように敵の指揮官の狙撃など、特殊な教育を受けました。そのためには、精神教育、勅諭、戦陣訓などを身をもって体験しなければなりませんでした。

昭和十九年五月に卒業、呉へ帰り、第三十一根拠地隊員としてルソン島の北サンフェルナンド基地隊勤務のため、七月二十六日、「華山丸」で門司を出港しマニラへ向かいました。その間、敵潜水艦の攻撃があ

り、見張りに出ましたが、魚雷をかわしながらの航海で、途中、旭第二十三師団の海没兵を救助したりもしました。航行途中、ドラム缶や筏が流されて来ましたが、人が乗っていないので、恐らく既に死んでしまったでしょう。

八月四日、マニラ港に着きましたが、港には海没艦の帆柱だけが林立していました。マニラに着いて、八月十八日までいて、元米軍造船船所のあったキャプターに駐屯していました。その際は隨身兵器は持っていましたが、重火機は後からの輸送を待っていました。

そこに十日間いて、北サンフェルナンドへ行き、ここで十三ミリMG（重機関銃）を受領して、防壘を作りました。弾丸は、撤甲・破壊・焼夷・曳光弾等に色分けがしてありました。機銃弾倉は円盤であり、大発にあつた七・七ミリ重機関銃は外して持っていきまし。グライNDERの金工、木工、通信隊技術者は命令で配属されました。一般の召集兵は、いわゆる「足軽役」で、消耗（戦没）は多かつた。我々は技術グルー

ブと足軽との中間におりました。

九月から十月にかけて、我が陸海軍部隊が北サンフェルナンドへ入港しました。そのため比島のゲリラが狼火のさしを上げると、米軍のB 24が飛来し偵察する。その後、グラマン機の空襲がありました。

その頃はまだ、北サンフェルナンドは有力者の邸宅や商社などがあり、陸・海・空の部隊もあつたし、通信機関、サルベージ、船舶工兵、船舶司令部、更には憲兵隊なども湾内各所にありました。その他、現地住民も多数住んでいました。

グラマン機を撃墜したら米兵が落下傘で湾内に落ちました。我々は大発（大型発動機船）で救助に行きました。その兵は火傷をしており、飛行機がサンゴ礁に引っかかり斜めになっているのを発見しました。応急隊が兵隊を救助した（それは、敵味方の区別なく）。その後、私は米兵を憲兵隊に引き渡したのです。

十月中旬のことで、台風があり、船が打ち寄せられていましたが、その時は「神風」というのでしょうか、米艦隊が沈没しました。砂糖船が砂浜に打ち上げ

られ、砂を煮詰めると餡ができたと言われました。その後、十月末から十一月にかけて警戒態勢が敷かれ、軍用点検が行われるようになりました。

軍司令部より「敵上陸の公算大なり、警戒体制を敷け」との命令がありました。そのため海軍は陸戦隊組織になりました。隊長は、日支事変当時の上海海軍陸戦隊の隊長でした。海上見張りも厳しくなりました。

昭和二十年一月七日、リンガエン湾に米艦隊が来襲、艦砲射撃をして来ました。その時、北サンフェルナンドから、特別攻撃隊「金剛隊」が敵艦に体当たりをしているのがよく見えました。

情報には、ゲリラに対する措置が指示されましたが、その後の暴風により、日米両軍の死体が浜に打ち上げられ転がっていました。その中には多数の民間人も含まれていましたので、悲惨なものでした。

米軍が上陸してくると、朝鮮兵等が投降していたというし、当然パニック状態となっていました。米の威力偵察隊が民間人の家屋を捜索したりしていました。

海没した者は裸で上陸した者も多かったという。また、比島人の家のピアノの下に短波受信器と乱数表もあつたりしたので、これで日本軍の状況を米軍に通報していたのでした。また、住民は狼火により米軍に通報していました。

我々は、防塁を築いて上陸軍を待ち構えていました。我々正面の北サンフェルナンドには上陸して来なかつた。米軍来襲による犠牲者は一万人以上で、他に馬匹・食料・医薬品・資材・兵器等が海没したのです。

その後、一月十九日頃から命令が出て、我々は、バギオを目指して陸戦をしながら行動したのです。その後、米軍は北サンフェルナンドの我々の陣地付近に上陸したのかも知れませんが、我々は知ることができませんでした。

米軍は、リンガエン湾の第二十三師団（旭兵団）の所に上陸したと聞きました。我が隊は四〇五〇人でバギオに到着、憲兵隊に申告をしましたが、バギオには日本の居留民もいました。二日程滞在し、靴下に米を

入れ次への出発準備をしていました。

当時我々は、海軍航空隊員ではなく、陸戦隊の隊員となっており、配属も陸軍になっていたので。従いまして、新命令は、北部ルソンの駿兵団（第一〇三師団）への配属でしたので、ツゲガラオ飛行場へ行ききました。その時は在留邦人も同行したのです。

ここは山岳地帯で、比島ゲリラが敵性化し、アルカラ、アリタホ、サンビセン、ビヤパッケ、ピノトランと進み、バヨンボンでは、ゲリラを切り殺して戦犯になった者もおります。私は慰霊巡拝の時知ったのですが、今は、バヨンボンにはホテルもあり、キリスト像もありました。

バヨンボンから奥は、厚生省の調査隊もあまり行っていないようですが、それからカガヤン川に沿って登り、ツゲガラオへ向かって行きました。在留邦人は体力も弱く、女性や子供、年配者も多いので、行き倒れるようになって減っていきました。軍人も下痢で倒れると、アリが体の穴という穴へと入って死体を食い、

そして、ウジがわく。そのため、我が隊では木を切って墓標として建てていきました。我が隊の中でも、四十何人のうち三十人は死んでいるでしょう。私は現在一人残って靖国の「みたま祭」には参拝しています。

命令により、ドモン川というカガヤン川の支流の流域にアバリへ行く五号通りのサンホセ盆地の草原地帯に駐屯したのですが、米落下傘部隊がアバリへ降下したので、我が西村小隊も駿兵団の青木参謀の支隊に混成陸戦隊として編入されたのです。

アバリ方面の海軍司令官は美野部少将でしたが、海軍陸戦隊の我々が助っ人となり陸軍の配属になったのです。ここには、大河内司令部から来た築城術の伊藤少佐がおり、木を切って丸太として陣地を構築しました。その陣地の中を兵隊たちが走ると、その陣地には多くの人員が居ると見せかけるのです。洗濯した服を着て、防毒面をつけて、立派な装備をして、おとりになる人がいましたが、弾に当たって死んでいきませんでした。立派な服装、死に装束で、死んでも見苦しくないと。

ようにとのことでした。

我等はここに終戦まで居たのですが、敵を迎え撃つ準備をしていました。その間、憲兵隊の命令でゲリラを捜査するため二手に分かれましたが、一軒の家に行って、中村憲兵軍曹の世話で鳥の腿を焼いて食べました。その時、ゲリラはサント・トーマス大学に居ると言う。自動小銃、U S Aの水筒を持っている。こちらは陸戦で訓練しているが、ゲリラは素人が多いので間一発、相手を倒したこともあります。

また、反対に日本の分哨がゲリラにやられて、秘密書類を取られたこともあります。戦後、アバリでは、中村憲兵少佐、吉田大尉等の憲兵をはじめ、戦犯として死刑になった人もおりました。

七月頃、ドモン川の辺りで、P 38（双胴の）が来ると、米軍はゲリラを先頭に襲撃して来ましたが、これを撃退したこともあります。日本の毎日新聞の記者等二十五人が戦没もしています。そんな中でも、我々海軍の軍人達は、八月十日の黄海海戦の戦勝日に皇居の遙拝をしていました。

七、八月になると、飛行機からビラが撒かれま
した。「この票を持って来れば、衣食住を与える」と書
かれていたので、我が隊から一、二人は出たのではな
いでしょうか。我々は血判までして、絶対に降伏はし
ないと誓い合いました。

その間は、蝟壺陣地について、いつ、敵が来ても撃
退する準備をしていました。合言葉の「山」と「川」
をつくって、陸・海軍でゲリラを迎え撃ちに行きまし
た。夜、敵は曳光弾を撃って、昼のような明るさに
し、日本軍の夜襲に備えていました。我々は敵との近
接戦を願って、覚悟をしていました。こちらは防禦戦
なので、敵が来るまで待つ戦法でした。

敵が来るたびに撃退していましたが、八月五日、十
日頃になると、あまり弾が来ない、そして観測機（プ
ロペラ機）が来たり、また、双胴のP38も来ました。

駿兵団は村岡中将、アパリには湯口旅団、西海岸に
は荒木兵団が陣地を構えていたけれども、我が部隊の
戦没の状況は分かりませんでした。これは西村隊長
も、他との連絡が取れぬのか、分からなかったと言わ

れました。

八月の末頃、軍司令部から軍使が来しました。終戦、
降伏の準備でした。銃の菊の紋章を削り、ひげを剃
り、服は洗濯をせよ、捕獲した敵の重火器は地中に埋
めました。

九月十八日頃、川を隔て、陸・海軍一緒。部隊指揮
官は、駿兵団（第一〇三師団）の青木參謀及び士官以
上と、下士官・兵は一緒となり、軍刀は緒を付け、住
所、氏名を書いて出す。米軍からは、降伏立介士官が
出ました。我々が書いた血判状は、聞くところによ
るとオーストラリアの戦争博物館にあったとか。

降伏日本軍の将兵は、トラックに乗せられそれぞれ
の収容所へ行き、収容されたのです。私は、命令で赤
十字病院勤務となり、所内の掃除などとしていて、軍医
付の当番のようなことをしていたのです。

比島各地での戦闘はようやく終結したのですが、戦
没者は五十一万八千人とされており、一般邦人はどの
くらい亡くなったのでしょうか。また、各部隊別の戦

没者はどのくらいだったのでしょうか。陸・海・官・民の別なくその詳細は果たして、あの混乱の中で、各隊、各自がバラバラだったのですから、良く分からないのでは、と私は今も思うのです。

三ヶ根山には「比島観音」が建立され、多くの人が参拝していますが、ブリス米軍中佐の碑も建っています。日本人を、アメリカ人の輸血によって治療、生還させた人であり、日本の勲章を授与されているのです。

私は、昭和二十年十二月二十三日、マニラを出港、二十一年一月三日復員し、名古屋の昭和区役所へ帰還の申告をしました。

私の海軍戦歴

— 東シナ海漂流記 —

岡山県 武 本 智 弘

私は、空母「雲鷹」便乗時、敵潜水艦の魚雷攻撃を

受け沈没、東シナ海に漂流、幸運にも救助された状況について申し述べたいと思いますが、私の軍歴は主要次のとおりです。

大正九（一九二〇）年

一月二十五日生まれ

昭和十五（一九四〇）年

十二月一日、現役兵として入籍しました。入籍番号は呉・水四四八八〇号で呉鎮守府所属です

昭和十六年

一月十日 呉海兵団入団し海軍四等水兵を命ぜられました

四月十五日 三等水兵を命ぜられ、軍艦「八雲」（元一等巡洋艦）で、古い歴戦の艦でした。海軍は勤務・学校を繰り返し、海軍軍人としての戦闘訓練と、学術・専門技術を学校で学ぶのです

昭和十七年

四月三十日 水雷学校第七十八期普通科水雷術（魚雷）練習生として入校する

五月一日 海軍二等水兵を命ぜられる